

## 能登大納言小豆の晩播における無培土狭畦密植栽培

### 1 背景・目的

能登大納言小豆は気象条件の影響を受けて収量が不安定となりやすく、特に夏季の高温により着莢数が減少して著しく減収することがある。そこで、高温対策技術の一つとして、晩播での無培土狭畦密植栽培における増収効果と播種適期を検討する。

### 2 技術のポイント

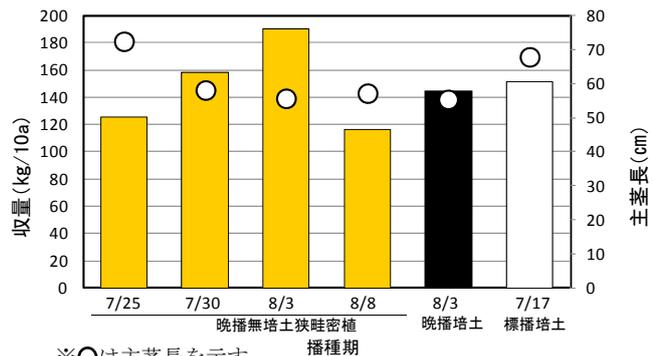
- (1) 晩播において、条間40cmの無培土狭畦栽培で栽植密度を慣行の2倍とすることで、標播の慣行培土と同等以上の収量が得られる。また、狭畦密植にすることで莢の成熟が揃い成熟期も早くなる(表)。
- (2) 無培土狭畦密植栽培では茎葉による遮蔽効果のため、雑草が抑制される(写真)。
- (3) 無培土狭畦密植栽培での7月30日、8月3日播種では倒伏が抑制され、収量も多くなる(図)。
- (4) 以上のことから、晩播では7月30日～8月3日頃に播種し、栽植密度を慣行の2倍となる25000本/10aに密植する。

表 晩播における無培土狭畦密植栽培が生育、収量に及ぼす影響(平成24年)

試験区	条間 (cm)	栽植本数	播種期 (月/日)	開花期 (月/日)	成熟期 (月/日)	収量 (kg/10a)	莢数 (莢/m <sup>2</sup> )	百粒重 (g)
晩播無培土狭畦密植区	40	25000本/10a	8/3	9/10	11/17	190.1	238.3	27.6
晩播培土区	80	12500本/10a	8/3	9/12	11/22	145.0	231.3	27.6
標播培土区	80	12500本/10a	7/17	9/4	11/24	151.5	234.8	29.2



写真 晩播での栽植密度の違いによる生育の様子  
(平成23年)



※○は主莖長を示す。  
図 晩播の無培土狭畦密植での播種期の違いによる生育と収量 (平成24年)

### 3 成果の活用と留意点

- (1) 晩播での無培土狭畦密植栽培は増収効果が得られ、無培土で除草剤の散布回数も少なく、栽培作業を簡略化できる。
- (2) 条間が狭いため、防除作業用の通路を設ける。

問合先：能登特産物栽培グループ TEL 0768-67-2104  
担当者：磯辺美里